

高句麗史の帰属をめぐる韓国・朝鮮と中国の論争

金 光林

1. はじめに

高句麗は紀元前1世紀頃から紀元668年まで中国東北地域と朝鮮半島北部地域にまたがって存在した東アジアの古代王国である。高句麗については、従来、朝鮮の古代史と見なされてきたが、1980年代頃から中国の歴史学界において高句麗は中国の歴代の中央政権に隷属・臣属された地方政権であり、そのために中国の歴史に属するという主張がなされた。1980年代頃までは高句麗が中国東北地域だけではなく、朝鮮半島北部地域にまたまたがって存在した点が考慮されたため、一方的に高句麗は中国の地方政権であるという主張よりは、西暦427年に高句麗が現在の中国境内の国内城（吉林省集安市所在）から平壤へ都を移した後は朝鮮の古代史と見なし、高句麗の歴史は中国史でもあり、朝鮮史でもあるという、いわゆる「一史両用」論が主流であった。ところが、1990年代の後半から高句麗は中国の歴代の中央政権に隷属・臣属した地方政権であり、高句麗が領有していた朝鮮半島北部地域も中国人が建国した箕子朝鮮・衛満朝鮮の故地であり、漢四郡が置かれたところであるから、朝鮮半島北部地域も中国の縁故地であり、高句麗は完全に中国の歴史に編入されるべきであるという主張が強まった。特に2002年2月に中国社会科学院が「東北辺疆の歴史と現状に対する系列研究プロジェクト」(略称「東北プロジェクト」、以下本稿ではこの略称を用いる)という研究プロジェクトを立ち上げ、韓国・朝鮮と歴史論争の素地のある古朝鮮・高句麗・渤海の研究を同プロジェクトの重要な課題にしてから、高句麗を中国史として見なすべきであるという主張が中国でさらに強まった感がある。一方、中国社会科学院の「東北プロジェクト」の実体が韓国に伝わり、中国政府が高句麗史の中国史編入を目的にこの国策研究プロジェクトを推進していると見なされ、2003年12月頃から韓国の歴史学界・言論・市民団体から強い反論・反発の声があがり、韓国政府も外交ルートを通して中国にこのプロジェクトに対する憂慮を伝えたと言われる。北朝鮮の反応は現在のところ公式的に出されていないが、北朝鮮の従来の歴史観から高句麗史の中国史編入を容認しているとは思えない。

日本と韓国・朝鮮の間では、かつて「任那日本府」の実体、高句麗の「広開土王碑」の碑文の内容をめぐる歴史論争が起こったことがあり、1980年代には日本と韓国・朝鮮、中国との間に日本の歴史教科書の記述をめぐる論争になり、外交問題にまで発展

したことがあった。今回の高句麗史をめぐる論争も東アジアにおける歴史論争の一つであり、中国と韓国・朝鮮の間の歴史認識の問題だけではなく、東アジア史をどういうふうに捉えるべきか、東アジアにおいて歴史をどういうふうに共有すべきなのかという問題でもあり、今後、東アジアにおいて未来志向的地域共同体を形成していく上でも是非解決すべき課題である。

本稿では、高句麗史の帰属をめぐる中国の主張と韓国の反論を辿りながら、この問題をめぐる韓国・朝鮮と中国の論争の実体を明らかにし、この論争のゆくえについて論じたい。

2. 中国における高句麗史の帰属問題と「東北プロジェクト」

高句麗の歴史について、中国の古代の史書においては「東夷」の歴史の一部として記載する機会が多く、その歴史を中国史に帰属させる意識は希薄だったと言える。近代に入って、高句麗の「広開土王碑」に代表される金石文の研究が中国人の高句麗研究の先駆けであった。中国において、高句麗の研究が進むにつれて、一部の研究者から高句麗の歴史を中国史の延長線上で捉えるべきだという主張がなされたが、近・現代の中国歴史学界では高句麗の歴史を朝鮮史の一部と見なす見解が支配的であった。現在の中国政府も以上のような見解を支持したと見られ、62～63年には中国政府と北朝鮮政府が共同で中国内の高句麗・渤海遺跡を調査し、発掘遺跡の一部を北朝鮮に提供したと言われる。

しかし、1980年代に入ると、中国における高句麗史の研究がより積極的になると同時に高句麗史を中国史の一部と見なす見解が中国の研究者の間で増え始め、西暦427年に現在の中国境内の国内城から平壤へ遷都する以前までの高句麗は中国史であり、平壤遷都以後は朝鮮の歴史であるという、いわゆる「一史両用」論が多くなされた。このように、中国で高句麗史研究が積極的に行われ、高句麗史を中国史の一部に編入する動きが出てきたのは、その直接的なきっかけは79年から83年にかけて北朝鮮の社会科学院歴史研究所が『朝鮮全史』（全35巻）を発行したことにあると考えられる。

『朝鮮全史』の古代史の部分において、朝鮮史の主体性が強調され、朝鮮半島北部地域と中国東北地域に跨って建国された古朝鮮の存在、同じように朝鮮半島北部と中国東北地域に跨って建国され、隋・唐など中国王朝と堂々と争った高句麗と渤海の自主性などを特に強調したことに対する反発が中国の東北地域史研究者たちの間で広まり始めたと思われる。朝鮮史の主体性を強調すると、中国からの独自性、時には対立関係を浮き彫りにすることになり、朝鮮民族の起源が現在の中国東北地域と密接な関係にあるため

に、朝鮮の古代史の領域が中国東北地域にまで及んでしまう。そのために、そもそも朝鮮古代史の叙述が中国との波乱要素を含むものである。

もう一つ、近年、中国において高句麗の研究が積極的に行われ、高句麗史を中国史に編入する動きが強まったのは韓国との関連もある。92年に中韓両国の国交が樹立されてから、韓国から大勢の研究者が高句麗の遺跡の研究・調査に中国東北地域を訪れ、中国内の高句麗遺跡を見学する韓国人も多く、韓国においても高句麗史に対する国民的関心が高い。その過程で一部の民族主義的な韓国人たちが中国へ行き、高句麗・渤海の旧領土は韓国のものであるという主張をして中国側の警戒感を引き起こしたりした。こういうことによって、南北朝鮮が統一されたら高句麗・渤海を理由に中国に領土要求をするだろうという警戒感が中国の東北地域の研究者たちの間で起こり、そのために中国における高句麗史研究が盛んになり、高句麗史を中国史に編入する動きが強まった。筆者が中国の社会科学院の研究者から直接聞いたところによると、2002年2月からスタートした中国社会科学院の「東北プロジェクト」は東北地域の高句麗・渤海研究者たちの強い要望によるものだという。

こういう経緯もあり、中国における高句麗の帰属問題に関する論調は中国と韓国・朝鮮の領土問題、国境を強く意識するものとなった。西暦427年に高句麗が現在の中国境内の国内城から平壤へ都を移す以前は中国史、それ以後は朝鮮の古代史だとして、高句麗の歴史は中国史でもあり、朝鮮史でもあるという、いわゆる「一史両用」論自体が現在の中国と朝鮮の国境を念頭に置いたものであった。現在はさらに発展して、高句麗史は完全に中国史という主張の背景にも、現在の中国領土内に朝鮮の古代国家が存在したという事実を受け入れないためである。

主に中国の東北地域（遼寧省・吉林省・黒龍江省）の研究者たちによって始まった高句麗史の研究は、1980・90年代を経過しながら、1,000篇を超える論文が発表されるほど研究が盛んになり、90年代中頃からこれまでの高句麗史を中国と朝鮮の両国がその歴史を共有するという、いわゆる「一史両用」論よりは高句麗史を全面的に中国史の一部と見なす見解が優勢になってきた。しかし、この問題がこの時点までは韓国・朝鮮と中国の研究者の間で論争されることはあっても、国家間の表立った歴史論争にまでは至らなかった。

この問題が水面に浮かび上がり、大きな論争になり始めたのは、2001年に北朝鮮が高句麗の壁画古墳をユネスコの「世界文化遺産」として登録申請をしてからである。1998年10月に世界遺産協約の加入国になった北朝鮮が国際記念物遺跡協議会（ICOMOS）と文字文化保存及び復元研究センター（ICCRoM）の財政的・技術的支援を受けて、

遺跡を整備した後、2001年に登録申請をした。中国の研究者たちの間では、北朝鮮の高句麗壁画古墳の「世界文化遺産」の登録申請を政治的行為と批判する主張がなされ、中国政府も高句麗遺跡の「世界文化遺産」の登録を北朝鮮が単独で行うことを望まなかったようである。そこで、中国政府は2001年末に急遽文化部副部長を北朝鮮に送り、高句麗の遺跡を中国と北朝鮮が共同登録することを勧誘したが、北朝鮮によって拒否されたと言われている。その後、2003年6月30日から7月5日の間にパリで開かれた第27回世界遺産委員会(WHC)において、北朝鮮が登録申請した63基の高句麗壁画古墳が登録を1年間延期された。延期の主な理由は国際記念物遺跡協議会(ICOMOS)が実施した報告書に、北朝鮮が高句麗古墳群に対して十分な資料を提供せず、文化財保護管理に問題点があるなどの問題が指摘されたためであるが、この報告書を中国人学者が作成し、韓国の関連研究者の間では北朝鮮の高句麗壁画古墳が登録を延期されたのは中国の牽制があったためであると見なされている。

この頃から、高句麗の帰属問題は中国の重要な国家的政策課題となったと見られ、中国社会科学院と東北三省(黒龍江省・吉林省・遼寧省)政府の宣伝部門の後援を受けながら、中国社会科学院辺疆史地研究センターが中心となり、2002年2月から5年間の研究期間を設けて大量の人員と資金を投入するといわれる、「東北プロジェクト」という研究プロジェクトを立ち上げた。この「東北プロジェクト」は中国の東北地域の歴史全体と国境問題を巨視的に研究することを主旨とするが、韓国・朝鮮と歴史論争の素地のある古朝鮮・高句麗・渤海の研究が重要な研究課題に挙げられている。

この「東北プロジェクト」がスタートしてから、中国では東北地域の研究者を中心に古朝鮮・高句麗・渤海に対する研究が盛んになり、一種のブームの様相さえ帯びている。2002年2月に「東北プロジェクト」がスタートから、中国では高句麗に関するシンポジウムが3回も開かれ、同時に高句麗=中国史という認識も広がっている。一方、中国政府は2001年に行った北朝鮮との高句麗遺跡の「世界文化遺産」の共同登録要求が拒否されると、吉林省の集安と遼寧省の恒仁にある高句麗の首都と王陵・古墳を「世界文化遺産」の暫定目録として提出し、2003年1月に「世界文化遺産」登録を正式に申請した。そして約半年くらいの時間をかけて吉林省の集安と遼寧省の恒仁にある高句麗遺跡を大規模に補修し、同年9月には国際記念物遺跡協議会の現地調査も受けた。そして今年の7月1日に中国江蘇省蘇州で開催された第28回世界遺産委員会で、北朝鮮と中国の両国がそれぞれ申請した自国内の高句麗遺跡が「世界文化遺産」として同時登録が認められたのである。

現在、中国の学界において高句麗史を中国史の一部と主張する主な論拠は次のようなものである。

1. 高句麗は中国の中原王朝の統治秩序の中で建国された。

高句麗が誕生した地域は紀元前3世紀には燕の領域であり、秦が六国を統一した後は秦の「遼東外遼」に属した。紀元前108年に漢が衛満朝鮮を滅亡させ、玄菟郡を設置した際に高句麗は玄菟郡内の高句麗県に属していた。紀元前37年に高句麗の始祖朱蒙が高句麗の五部を統一し、建国したのも漢朝の玄菟郡の領土内であった。高句麗の建国はこのように中国の領土内で行われたものであり、朝鮮とは直接的な関係がない。

2. 高句麗は独立国家ではなく、中国の中央王朝の地方政権である。

高句麗の始祖朱蒙の建国以前の高句麗県はすでに漢朝の玄菟郡に属し、東漢の180年間に高句麗は東漢王朝に臣属していた。西暦220年から426年まで高句麗は中国中央王朝に臣属し、高句麗侯・高句麗王・征東大將軍・營州刺史・樂浪郡公などの官職を授けられていた。南北朝時期には、北魏・北齊及び南朝の各政権に貢物を納めた。また、北魏・北齊及び南朝の各政権からは高句麗王・都督遼海諸軍事・征東將軍・遼海郡公・領護東夷中郎將・散騎常侍・東夷校尉・驃騎大將軍・遼東郡開國公などの官職を授けられた。

高句麗が隋・唐と数回にわたって戦争を行ったが、その期間は合わせて10年程度に過ぎず、残る70年以上の期間は隋・唐に臣下として臣属し、隋・唐の中央王朝から官職を授けられた。このように、高句麗王国は始終中国の中央王朝の一地方政権であり、一時的な割拠状態を理由にその歴史の全期間にわたって中国へ帰属した事実を否定してはならない。

3. 高句麗民族は中国の古代の一民族である。

高句麗が滅びた後、高句麗の後裔たちの多数が中国の中原地域・突厥・渤海などに吸収され、中国の各種族に融合され、朝鮮半島の大同江以南の一部の高句麗人たちが新羅に統合された。今日の朝鮮民族の祖先は主に古代の三韓、即ち新羅人であり、朝鮮半島に移住した中国の各種族もかなり多い。しかし、高句麗の後裔は少数である。

4. 隋・唐と高句麗の間の戦争は中国における国内戦争である。

今日の中国と朝鮮の国境を境にすれば、隋・唐の高句麗に対する戦争は侵略戦争であるが、高句麗の領域は高句麗の建国以前の1000年間（箕子朝鮮・衛満朝鮮600年、樂浪郡400年）も中国の漢民族が支配していた地域であるために、隋・唐が高句麗を攻めたのは侵略戦争ではなく、中国の民族内部の統一戦争であり、高句麗が樂浪郡を滅ぼしたのも中国内部において展開された民族間の侵犯である。

5. 王氏高麗は高句麗を継承した国家ではない。

王建は新羅の將軍であり、新羅を滅亡させた後、高麗を建国した。王建は新羅の金氏

王族を継承したものであり、高句麗の高氏王族を継承したものではない。高句麗の旧領土の中で王氏高麗は大同江以南を占め、首都開城は新羅の旧領土であり、高句麗の旧領土ではない。王氏高麗は新羅人と百濟人、一部の高句麗人、漢人後裔たちが建国したものであり、高句麗の後裔たちが主軸となって建国したものではない。王氏高麗は朝鮮の歴史であり、今日の朝鮮民族の祖先が建国したが、高句麗（高氏高麗）は中国の歴史として今日の中国の各民族の祖先が建国したものである・

6. 朝鮮半島の北部地域も中国の歴史に属する。

朝鮮半島の北部地域が朝鮮民族の居住地になったのは15世紀以後のことである。したがって、5世紀に高句麗が首都を平壤に移したことから、高句麗を朝鮮の歴史と論じられない。15世紀以後の李氏朝鮮と箕子朝鮮・衛満朝鮮は朝鮮という名称こそ同じであるが、民族の構成と国家の帰属が異なるので、同列に見なされない。李氏朝鮮は朝鮮民族が建国した朝鮮の歴史であり、箕子朝鮮・衛満朝鮮は中国の漢族の祖先が建国し、中国の歴史に属する。高句麗が首都を平壤に移す以前は中国の歴史であり、平壤遷都以後は朝鮮の歴史というのも間違った考えである。高句麗が二つの国に分かれて所属することはできないし、当時の国境を考えると、5世紀前後の高句麗も中国の領土の中にあった中国の地方政権である。

唐は大同江以南の地域を新羅に割譲し、遼は鴨緑江の東側の女真の領土を高麗に割譲し、明は図門江（豆満江）以南の土地を朝鮮に割譲した。すなわち、今日の中国と朝鮮の国境は朝鮮民族が北側に勢力を拡張して形成したものである。

他にも、中国では高句麗の民族の起源を濊貊族、または夫余族に求める見解が従来は有力であったが、近年は中国の中原の漢民族と高句麗の起源を関連づける主張も多くなされるようになった。

3. 韓国・朝鮮における高句麗史の帰属問題と「東北プロジェクト」への反応

すでに935年に建国された高麗王朝が高句麗を継承するという意思な明確を持ち、そのために国名を「高麗」とし、高麗時代に編纂された『三国史記』『三国遺事』において、高句麗・新羅・百濟を古代朝鮮の三国と規定し、以後の朝鮮の歴史書も以上のような記述を踏襲し、高句麗人が同時代の百濟人・新羅人と同類意識を持ち、文化的にも百濟・新羅と同質的性格が強いと思われたため、韓国・朝鮮においては高句麗史を朝鮮史の一部と見なすことに疑問を持つことはまずはなかった。1980年代頃から、中国の一部の高句麗研究者の間で高句麗史を中国史と公言することに反感を感じる韓国・朝鮮の研究者

が多く、1993年に中国吉林省集安で開かれた高句麗史国際シンポジウムにおいて、中国の高句麗史研究家孫進己が高句麗史を中国史と発言したことに対して、北朝鮮の歴史学者朴時亨が「国境が変わったから歴史が変わるのか」と反論したことなどが知られる。それでも、中国の「東北プロジェクト」がスタートするまでは、韓国・朝鮮で高句麗史の帰属問題をめぐって中国と公に論争することは少なかった。

2002年2月に中国の国策研究の性格の強い「東北プロジェクト」が正式にスタートし、「東北プロジェクト」の目的の一つが高句麗史の中国史編入にあると思われたため、韓国で強い反発が公然と起こった。韓国では2003年12月から1月頃までにメディアに「東北プロジェクト」を通じた高句麗史の中国史編入が大きくクローズアップされ、メディアによる反論・反発はもちろん、学界・市民団体・韓国政府のいずれからも反発の声が上がり、具体的な対応策が出ている。

まず、韓国の学界の反応である。2003年11月19日に韓国古代史学会など複数の韓国歴史の関連学会により「高句麗史歪曲共同対策委員会」が発足し、12月9日には韓国古代史学会・韓国考古学会・韓国近現代史学会・韓国歴史研究会などの17の韓国歴史の関連学会が共同声明を発表して、中国が国策事業の「東北プロジェクト」を通して、高句麗史を中国史に編入することに抗議を示し、韓国政府にも外交通商部による中国政府に対する抗議と是正、教育人的資源部による「古代北東アジア研究センター」の成立、北朝鮮政府がユネスコに申請した高句麗古墳群の「世界文化遺産」の登録を韓国政府の文化観光部が支援することを要求した。それから韓国の歴史学者たちが盛んに討論会・シンポジウムを開き、中国による高句麗史を中国史に編入する動きに対する批判と対策を検討し、韓国の古代史研究を強化することを主張している。中国の「東北プロジェクト」を契機に韓国の学会においては高句麗史の研究がたいへん活性化され、昨年の年末頃から高句麗史関連研究書が多く出版されている。

韓国の市民団体の反発も激しかった。2003年12月22日に「我が歴史を正しく知る市民連帯」が「高句麗守護汎国民100万署名キャンペーン」を始め、開始20日にして100万人の署名が集まった。「国学院」という民族主義性格の強い市民団体は2004年1月に中国の「東北プロジェクト」を通じた高句麗史の中国史編入を批判する英文書簡をユネスコと国際記念物遺跡協議会（ICOMOS）に送る「乙支文徳プロジェクト」を立ち上げ、2回にわたって実行した。他にも、複数の市民団体が街頭とソウルの駐韓中国大使館前で高句麗史の中国史編入に抗議するデモを行い、抗議書簡を中国大使館に渡したりした。一時は、韓国社会の国際化の流れの中で沈滞化していた民族主義団体が中国との高句麗史論争をきっかけにして再び活気を取り戻した感さえあった。

韓国の学界と市民団体の中からは、中国の「東北プロジェクト」を単に高句麗史の中国史編入だけに目的があるわけではなく、古朝鮮・渤海をも中国史に編入させることによって、朝鮮古代史の中国東北地域との関連性を源泉的に断絶させ、韓国・朝鮮における中国東北地域対する故土意識・縁故権を無くさせ、場合によっては現在の北朝鮮政権が崩壊した時の介入の名分をも作っているという主張も盛んに聞かれる。

韓国政府は、高句麗史の中国史編入が中国の一部の学者たちの主導によるものであり、中国政府の公式な見解であると見なし難いと判断し、高句麗史の中国史編入の動きに対する憂慮を外交ルートを通して中国政府に伝達したが、現段階で中国政府と高句麗史帰属問題を外交問題にすることを避けている。そこで、韓国の民間・学会レベルの高句麗史の研究を政府が積極的に支援することを決定し、2004年3月1日に高句麗史を中心に中国との論争の素地のある古朝鮮・渤海の歴史、古代から近代までの韓中関係史などを研究する高句麗研究財団を発足させ、政府関連機関主催による高句麗史国際シンポジウムを積極的に開催し、学術交流を通して中国学界内の高句麗史に関する歪曲された見解を正すことにした。同時に北朝鮮による高句麗遺跡の「世界遺産」登録を韓国政府も支援することにし、北朝鮮の高句麗の遺跡の保存・保護に韓国政府が資金・技術を提供することを表明している。

「東北プロジェクト」を通じた中国の高句麗史の中国史編入について、北朝鮮からの公式的な反応はほとんど伝えられていない。中国との外交関係を考慮してメディアなどによる反論は行っていないようである。しかし、2003年3月26日・27日に韓国のソウルで「高句麗史歪曲共同対策委員会」主催による「高句麗の歴史と文化遺産」という国際学術シンポジウムにおいて発表された北朝鮮学者の論文内容を見ると、北朝鮮の学界が中国による高句麗史の中国史編入を容認するとはとうてい思えない。2003年7月1日に中国の蘇州で開かれていた第28回世界遺産委員会では北朝鮮と中国の高句麗遺跡をそれぞれ「世界文化遺産」として登録することを決定した。この会議において、北朝鮮と中国の政府代表は相互に相手の領土内にある高句麗遺跡の「世界文化遺産」登録を支持したと伝えられている。両国政府とも高句麗遺跡の「世界文化遺産」登録を優先し、高句麗の帰属問題の外交問題化は避けたと見られる。

現在、韓国の学界からは高句麗史 = 中国史という論理的主張に次のように反論している。

1. 高句麗の建国が中国の中原王朝の統治秩序で行われたという主張について、高句麗が中国の中原王朝に臣属することはあったが、高句麗の歴史は一貫した独立王朝の歴史であり、高句麗が中国東北地域と朝鮮半島北部地域から中国の漢民族の郡県制を消滅させ、朝鮮半島の百濟・新羅両王朝の成立を促したことは朝鮮民族史の形成にとつ

て画期的な意義を持つ。

2. 高句麗は独立国家ではなく、中国の中央王朝の地方政権であるという主張について、高句麗が中国の中原王朝に朝貢する時期があり、官職を授与された時期もあったが、これは東アジアの前近代の国際関係の中でよく行われた外交的儀礼であり、中国の論理をそのまま適用すると、百済・新羅・倭国、ベトナムの古代王朝も全部中国の地方政権ということになる。高句麗は中国の中原王朝だけではなく、同時代の百済・新羅・倭国とも国交を結んでおり、明らかな独立王朝である。高句麗が中国の地方政権であり、百済・新羅が独立王朝というが、中国の王朝との関係において、高句麗と百済・新羅の本質的な区別がない。そもそも高句麗の存立期に中国に一貫して中央政府と呼べる統一王朝が存在したこともない。
3. 高句麗が滅びた後、高句麗の後裔たちの多数が中国の中原地域・突厥・渤海などに吸収され、中国の各種族に融合され、現在の朝鮮民族の中に高句麗の後裔が少ないという主張に対して、韓国の学界では最初は幾らか当惑を感じた。高句麗が滅びた後、少なくない高句麗人が唐の強制移住策によって中国の内地に移住させられたのは事実だからである。しかし、高句麗の故地に残された高句麗人たちが盛んに高句麗の復興運動を行い、その結果として渤海国が建国され、高句麗の故地には中国内地に移住させられた高句麗人よりもっと数の多い高句麗人が残り、彼らが渤海と新羅に加わり、渤海の滅亡後は多数の人々が高麗に吸収された。以上の事実はすでに多くの史料から確認できるし、高句麗人と現在の朝鮮民族が直接的な民族的つながりがないという論拠は根拠が薄弱である。
4. 隋・唐と高句麗の間の戦争は中国の国内戦争であるという主張について、高句麗が厳然たる独立国家である以上、中央政権対地方政権という中国国内戦争論は論理が成立しない。
5. 高麗が高句麗を継承していないという主張に対しては、高麗は高句麗の復興運動を継承する過程で建国され、そのために国名を高麗とし、高麗王朝における高句麗の継承意識は明確である。
6. 古朝鮮の箕子朝鮮・衛満朝鮮が中国人が建国したという伝承を根拠に朝鮮半島北部地域は中国の歴史に属するという主張に対して、箕子の朝鮮建国説は伝説に過ぎず、衛満朝鮮も一部の中国人が建国に加わったからと言って多数の朝鮮人による王朝を中国の歴史である断定できない。

この他に、中国の中原の漢民族と高句麗の起源を関連づける主張に対しては、正面から反論する必要すら韓国の学界では感じていないようである。

4. 高句麗史の帰属をめぐる韓国・朝鮮と中国の論争のゆくえ

2002年2月からスタートした中国の「東北プロジェクト」が韓国に一般に知られるようになってから、公になった韓国・朝鮮と中国の間の高句麗史の帰属をめぐる論争は、韓国と北朝鮮政府と中国政府の慎重な態度により、外交的問題にまではならず、現在のところ両国の関連学界の論争と韓国の言論・市民団体からの反発に留まっている。これは日本と韓国・朝鮮、中国の間で80年代に日本の歴史教科書記述問題が外交的紛争にまで発展したことはよい対象をなす。それでもこの問題は韓国・朝鮮と中国の間で外交的紛争にまで発展する可能性を排除はできない。例えば、中国政府が国定教科書に高句麗史を中国史に編入する場合などである。すでに中国では今年の7月1日に世界遺産委員会により中国境内の高句麗遺跡を「世界文化遺産」として登録を認められてから、「新華社」「人民日報」など中国の代表的メディアが高句麗は中国史であるという報道をしはじめている。「東北プロジェクト」は東北地域の歴史は中国の歴史であるという歴史教育の強化をプロジェクトの課題に組み入れている。現在は中国の多数の国民に高句麗史が中国史であるという意識が希薄であるが、歴史教育の強化により、中国の国民の間で高句麗史に対する関心とともに高句麗史＝中国史という認識が広まり、国定教科書にも高句麗史が中国史として記述されれば、韓国・朝鮮と中国の間で高句麗史の帰属をめぐる論争がさらに起こり、国家間の外交問題にまで発展する可能性がある。

朝鮮と中国は陸地によって国境を接している隣国同士であり、特に古代には中国から朝鮮に移住する中国人が多かったと見られ、そういうことを背景に中国の殷の箕子東來說（箕子朝鮮）燕の衛満の朝鮮建国説（衛満朝鮮説）が生まれた。こういう伝説が現在は確かな根拠はないとされるが、古代の朝鮮の歴史に中国東北地域と朝鮮半島に流入した中国人が深く関わったことは事実である。後の漢四郡（楽浪郡・臨屯郡・真番郡・玄菟郡）が中国東北地域から朝鮮半島北部地域にかけて存在したのも事実である。しかし朝鮮の歴史に中国人が関わっただけではなく、中国で「遼東」と呼んでいた東北地域には中世以後も朝鮮人の移住が多く、明の時代には「遼東」に多数の朝鮮人が居住していた事実も明らかになっている。このように陸地によって隣接し、古代から交流が盛んだったために、朝鮮と中国の関係史には相互の一国史だけでは割り切れない交差的部分が存在し、一国史観を脱皮し、より巨視的東アジア史観によって歴史を照明する必要もある。

しかし、中国で現在強まっている高句麗＝中国史という主張はより開かれた東アジア史観の形成を目指すのではなく、却って伝統的な中華中心の天下観（中華思想）の表出

であるといっても過言ではあるまい。

中国の学界の高句麗史 = 中国史という主張はいろいろ論理的に根拠を提示はしているが、やはり根本的な前提は高句麗の旧領土の約三分の二が中国東北地域に残り、高句麗の多くの歴史遺跡がそこに残っているためである。現代の中国では70年代頃までは高句麗史帰属問題が真剣に考慮されたとは思えず、学界では一般的に高句麗史を朝鮮の古代史として理解していた。しかし、80年代から北朝鮮の主体性の強い歴史研究の動向が伝えられ、それに刺激される形で高句麗研究が積極的に行われ始め、西暦427年の平壤遷都以前までは中国の地方政権、平壤遷都以後は朝鮮の古代王朝という、いわゆる「一史両用」論が多く主張されるようになった。この「一史両用」論の根本前提が現在の朝鮮と中国の鴨緑江を境界線とする国境にあることは容易に推測できる。しかし、90年代後半に入り、高句麗は完全に中国の地方政権であるという主張が有力になりつつあり、中国の学界では高句麗を「中国高句麗」という名称で呼んでいる。こういう変化の背景には学術研究の成果が反映されていないとは言えないが、韓国・朝鮮の学界が朝鮮の古代史の領域を中国東北地域にまで比定することへの反発、それよりもまして中国の開放化と経済成長により自由な研究と発言ができるようになり、中華的自信感が大きくなったことにより近隣諸国に対する配慮よりは伝統的中華中心の天下観が中国の知識人たちの間で台頭していることに関連があろう。伝統的に中国では中華中心の天下観が根強く存在し、現在の中国でも中国境内で発生した様々な歴史はすべて中国の歴史という「統一的多民族国家論」を堅持するところから、高句麗史に対して簡単に朝鮮史と認めることは難しいのである。しかし、伝統的中華中心の天下観の台頭により、中国本位で歴史を解釈すればするほど、中国の歴史領域は広がるようになり、それが周辺の韓国・朝鮮ばかりではなく、モンゴル・ベトナム・トルコ、極端な場合は日本までも巻き込む歴史論争ないし紛争を引き起こし、周辺諸国の中国に対する不信感と警戒感を増殖させる結果になる。近代に入り、伝統的な中華中心の天下観（中華思想）はかなり克服されたと思われたが、やはりこれは中国においては依然として克服すべき課題である。前近代における中国の王朝と近隣諸国の王朝との朝貢関係を国家と国家間における外交的儀礼と見なすが一般の見解であり、この問題を拡大解釈しはじめると、高句麗ばかりではなく、中国周辺の多くの王朝が中国の地方政権になる。中国の歴史は常に統合と分裂を繰り返し、中国内に一貫して中央政権なるものが存在したわけではない。それなのに高句麗王朝の7百年に及ぶ歴史をすべて中国の中央王朝との隷属・臣属関係に結びつけて時代区分をし、その独立性を認めようとしないのは、自国の歴史と言いながらも高句麗の歴史を矮小化し、歪めることでもある。また、現在の中国領内で起こった過去の歴史すべて

が中国の歴史であるかも疑問である。多くの民族と王朝が盛衰を繰り返した東アジアのダイナミックな歴史を東アジアという巨視的次元ではなく、中華中心の天下観でしか捉えないのも一種の東アジア歴史の不幸である。

中国が「東北プロジェクト」を通して高句麗史を中国史に編入するということが韓国に伝わると、韓国の多数の国民、特に歴史学者たちが一種の衝撃を感じた。例えば、高句麗を中国史だと認めれば、自ずと古朝鮮も中国史であると認めることになり、渤海に関しては朝鮮史との関連性を主張することもできなくなる。そうすると、韓国（朝鮮）の歴史は1000千年も短縮され、朝鮮半島北部は朝鮮の古代史の領域から消えることになる。そのために中国の高句麗史＝中国史という主張に激しい反論と反発の声があがった。これは公には報道されていないが、北朝鮮でも同じことが言えるだろう。そのために、昨年の12月頃から韓国では高句麗史に関する国民的関心がさらに高まり、高句麗史に関する学術シンポジウム、討論会、市民講座などが盛んに行われている。一方、中国の高句麗史＝中国史という主張を契機に、韓国に根強く存在する単一民族史観を反省し、相互に交錯する歴史の部分を実東アジア史という巨視的視点から捉えるべきだという主張、韓国の民族主義を止揚し、東アジアにおいて歴史対話を積極的に行うべきだという主張もなされるようになった。

中国の学界にも、「東北プロジェクト」に対する韓国の激しい反発が伝わり、韓国・朝鮮の古朝鮮・高句麗・渤海に対する研究成果を積極的に受け入れ、学術討論の共催などを通して歴史認識の差異を埋めるべきだという意見も出ている。

今後は、開かれた歴史認識を持ち、合理的な研究成果を尊重し、学問的対話を重ね、東アジア地域社会が未来志向的共同体へと志向していけば、高句麗史の帰属問題はむしろそれぞれの一国史観を脱皮し、より巨視的な東アジア史の中で照明される可能性がある。今年の7月に北朝鮮国内の高句麗遺跡と中国国内の高句麗遺跡がそれぞれ「世界文化遺産」に登録されたのも、中国による高句麗史の中国史編入に利するという憂慮の声はあるものの、高句麗の文化と遺跡の保護・管理の面では望ましいことであり、高句麗に対する国際的関心を高める上でもよいことである。

主な参考文献

申澄植著『高句麗史』、梨花女子大学校出版部、2003年。

盧泰敦著『高句麗史研究』、四季節出版社、1999年。

耿鉄華編著『中国高句麗史』、吉林人民出版社、2004年。

『月刊中央』（韓国のみんかん）2003年12月号・2004年1月号・2月号・3月号・4月号
の特別付録（「韓中高句麗史論争特集」）。

『朝鮮日報』（韓国の日刊新聞）2003年12月～2004年1月の高句麗関連記事。

主な参考サイト

<http://www.chinaborderland.com/cn>

（中国社会科学院が運営する中国辺疆問題に関するサイト）

<http://www.ohmynews.com/>（韓国のインターネット新聞）

